市の文化財

郡内文化を代表してきた、古い歴史の流れの中で、農耕と機織はこの市の発展に大きな力となつてきた。江戸文化をうけいれて、近代への歩みはいまもみられよう。

市内の数多い寺院をみても、その什宝である仏像や絵画は、室町時代から伝えられ、江戸中期には八朔祭の豪華な屋台の名作を残して、その引幕は世に知られ今も保存されている。さらに産業の沿革は治水にもつともよくあらわれて、対外をもうるほしてきた。

こうした歴史の中で、市民の文化はうけつがれ、また明日の文化を創造する力をもつといえよう。

聖観音像　（木造）

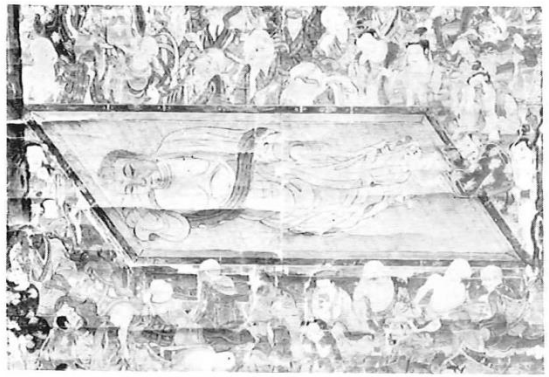
質素なうちに美しさを残し、容貌は古代彫刻に近い、背面の構成もすぐれている。甲斐国志は「行基作」と伝えている。
総長65cm（川茂浄泉寺）
←

縄文時代遺跡の出土品　縄文式土器としてはやゝ完全に近い型で出土し、上部の四隅が大波型であることは珍らしく、中期に属するもの、総高35cm（千乃宮）

祖暁禪師画賛　禅師は宝大奈良に生れた。曹洞宗の傑僧として学識奇行を世に知られた。書道の大家としても喧伝されている。（1731年歿）大幡安田安清氏蔵　→

郡名のある道祖神碑
この一帯を、羽休庄、羽休郡といわれた時代はかなり古い。「甲鶴羽休郡」市民には愛惜にたえないものをもつ。安永７年（1778）平栗浅間神社

裸馬群図　早馬町屋台中幕　柳文朝（南柳斉）作で、その構図の大胆さは、明治の馬の彫刻家後藤貞行を驚かせた傑作で、墨の動きがすばらしい、サイズはタテ2.15mヨコ7.20mで白チリメンである。



涅槃画像　絹本彩色　（部分）　↑

画面のサイズヨコ1.31mタテ1.74m、万治3年（1659）に補修した墨書がある。室町期末のものと思われ、長生寺の同画と好一対であろうか、得がたい逸作である。（広教寺）

鹿島踊り　新町屋台後幕

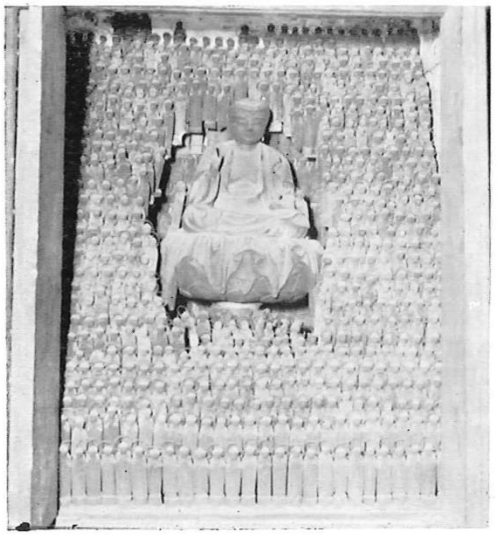
落款はないが、町では北斉筆と伝えている。すぐれた押絵によるボリュームは驚嘆にあたいする。サイズタテ2.18m、ヨコ5.60m、ビロードでフチどる。

双立道祖神碑　→

双身のものとして珍重され、この祖型ともいえるものが他にもある。年代をあきらかにできないが、江戸中期といわれる。（大幡春日神社）

↑ **屋台飾竜**

屋台を飾る竜の彫刻で4体がある。1.50mの金箔仕上である。これに付属する、北斉の筆になる「竜虎」の後幕は、国宝級の文化財といえよう。（下町）



←

千体薬師像　木像（厨子）

本尊の総長、15 cm、千体仏の1体は4 cm，本尊は坐像であるが、小さいながら他に類型のない美しさである。（大幡広教寺）

合掌型石橋　川茂用水　→

最もダイナミックの構成をもつ石橋で、むかしはかなりの数があつたものと思われる。用水の苦難とその生活をよくあらわしている、ここにも生活の歴史があるようだ。